

## 祈りの条件 第2回

## □ イントロダクション

聖書は、祈りが神に聞かれるためには、一定の条件を満たす必要がある、と教えている。たとえば福音書を見ると、イエスが少なくとも次の3つの条件を挙げている。

信仰をもって祈ること、イエスのうちにとどまっていること、そして、イエスの名において祈ることである。

前回からは、祈りの条件に関する学びに入った。この学びは、大きく二つに分けられる。

第一は、「**祈り手に関する条件**」、

第二は、「**祈り方に関する条件**」である。父なる神に、御子を通して、聖霊によって

□ 「**第一 祈り手に関する条件**」のアウトライン

A) 祈り手個人が満たすべき前提条件 13

- B) 罪を言い表すこと
- C) 目を覚ましていること
- D) 信仰をもって祈ること
  - 1. 信じること
  - 2. 何を信じて祈るのか
  - 3. 神の約束の上に立つこと
  - 4. 祈る前に信じていること

E) 神のみこころに一致していること

## □ 前回の内容 A) 祈り手個人が満たすべき前提条件 13

1. 誠実に祈ること
2. 畏怖の念をもって祈ること
3. 謙遜であること・・・祈りの中で自分がしたことを誇らないこと、自分の功績ゆえに祈りが聞かれるなどと思いがらないこと
4. 粘り強いこと・・・3段階を進む粘りを持つこと（祈り求める、祈りの答えを探す、門戸が開かれるようにたたき続ける）
5. 神のみこころを受け容れること
6. 神の命令に従うこと
7. 熱心に祈ること

8. メシアの中にとどまること・・・主イエス・キリストとの生き生きとした交わりの中にあること→主イエスが決めることを何でも求めるようになる→そのような求めであれば、それは叶えられる
9. 赦す心でいること・・・だれかに対し恨んでいることがあるなら、赦す。私たちに負い目のある人たちを赦す。
10. 悔い改めていること・・・自分の罪深さを心から認め、神の前にへりくだること。そして、主イエスが十字架において私たちの罪のため死んでくださったことを信じる。主イエスにあって罪赦され、神の目から完全に聖い者とされたことを喜び、感謝する。
11. 敬虔であること
  - (1) 詩篇 32 篇に敬虔な人 (6 節) とある。その人とは、「その背きを赦され、罪をおおわれた人」(1 節)、「主が咎をお認めにならず その霊に欺きがない人」(2 節)、「自分の罪を神に知らせる人」(5 節) である。
  - (2) そのような人が、他の詩篇箇所では、「正しい人たち」(詩篇 34 : 15)、「主を恐れる者」(詩 145 : 19)、「心の直ぐな人」(箴言 15 : 8) である。
  - (3) 詩篇 34 : 15 の「正しい人たち」は、新約時代においては、「悪に対して悪を返さず、侮辱に対して侮辱を返さず、逆に祝福しなさい。あなたがたは祝福を受け継ぐために召されたのです」(I ペテロ 3 : 9) を実行する人である。
12. 大胆であること・・・私たちには、私たちの弱さに同情できる大祭司がおられるから
13. 力強く祈ること・・・ヤコブ 5 : 16 「正しい人の祈りは、働くと大きな力があります」、この祈り **ギ**デエーシスは、熱意と強さをもって願い求めることを意味する。ヤコブ 5 : 17~18 では、預言者エリヤが紹介される。「エリヤは私たちと同じ人間でしたが、熱心に祈ると・・・」

#### □B) 罪を言い表すこと

1. 祈るときには、罪との関係でまっさらな状態になっていることが必要
  - (1) 詩 66 : 17~19 私はこの口で神を呼び求め この舌で神をあがめた。もしも不義を 私が心のうちに見出すなら 主は聞き入れてくださらない。しかし、確かに神は聞き入れ 私の祈りの声に耳を傾けてくださった。
    - 17 節「私はこの口で神を呼び求めた」とは、祈りを口にしたということ。この詩篇記者は証している、私が不義の中にとどまっているなら、祈ったとしても、その祈りは答えられないはずである。しかし、確かに神は聞き入れ、私の祈りの声に耳を傾けてくださった、と。

(2) 箴言 28 : 9 耳を背けておしえを聞かない者は、その祈りさえ忌み嫌われる

- 「耳を背けておしえを聞かない者」とは、神のことばに従おうとしない者、神の前にへりくだらない者である。神が罪であるとするを、罪であると認めることをしない者である。そのような者が口先で祈ったとしても、その祈りは、その者が言い表していない不義と同様、神にとって忌み嫌うものである。

(3) イザヤ 59 : 1~2 見よ。主の手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて聞こえないのではない。むしろ、あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。

2. 罪を言い表すことは、祈り手に求められる条件の中でも重要な条件である。では、もし罪に気づいたら、そのことを神の前に言い表すべきタイミングは？

(1) 「気づいたら即座に」というのが、理想的である

(2) それを逸した場合には、いつまで許されるのか、聖書が示すギリギリのタイミングとしては、2つある。

① エペソ 4 : 26 怒っても、罪を犯してはなりません。憤ったままで日が暮れるようであってはけません。→ 日没までに（その日のうちに）

② I コリ 11 : 23~33 → 聖餐式にあずかる前には、自分自身を吟味する

3. 私たち信者が罪を犯したとき、適用すべき神のことばは、I ヨハネ 1 : 9

I ヨハ 1 : 9 もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。

① 気づいている罪を告白する＝言い表すとは、神が罪であるとするを、たしかにそれは罪ですと、認めることである。弁解は無用、二度としませんというような誓いも不要である。自分がしたことは罪であったこと、このことを神の前に認めて、言い表すことである。これが、罪の告白の祈りである。

② 気づいている罪を言い表すと、気づいていない罪をも含めてすべての不義からきよめられる。よって、信者はこのとき、罪に関してはまっさらな状態、罪なき状態にされる。

③ そんな都合のいいことがあるのか？ 「神は真実で正しい方ですから」すべての不義から私たちをきよめるというのは、神のことば、神の約束である。「神は真実で」とは、神はご自分のことばをその通りに実行するお方である、約束したことに忠実なお方である、という意味である。信者が、気づいている罪を言い表すなら、その信者はその瞬間、すべての不義からきよめられる。それは、信者の努力ではなく、神ご自身の約束にかけて、である。

## □C) 目を覚ましていること

目を覚ましていることとは、思考を働かせてよく見張っていること、精神を集中して警戒していることである。

(1) マタイ 26 : 41 誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい。霊は燃えていても肉は弱いのです。

- 原文の語順は、「目を覚まして祈っていなさい、誘惑に陥らないように」英語では、**Watch and pray** で始まる。ここでは、イエスは、目を覚ましていることと祈ることを結び付けている。
- 目を覚ましている目的は、誘惑に陥らないように、である。

(2) マルコ 14 : 37~39 イエスは戻り、彼らが眠っているのを見て、ペテロに言われた。「シモン、眠っているのですか。一時間でも、目を覚ましていられなかったのですか。誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい。霊は燃えていても肉は弱いのです。」イエスは再び離れて行き、前と同じことばで祈られた。

- ① 34 節で、イエスは弟子たちに目を覚ましているように命じられた。
- ② それができなかった弟子たちにイエスは、38 節で「目を覚まして祈っていなさい」と改めて命じた。
- ③ そして、39 節で、ご自身は「再び離れて行き、祈られた」とある。
  - ここからわかること=目を覚ましているためには、祈るのが一番である。弟子たちに目を覚ましているように命じたが、弟子たちは眠ってしまった。その弟子たちにイエスは、「目を覚まして祈っていなさい」と改めて命じると共に、イエスご自身もそのことを実行した。「イエスは再び離れて行き、祈られた」。
  - 誘惑に陥らないように警戒し、よく見張っていること。これを「目を覚ましていること」とイエスは表現した。そして、目を覚ましていることと祈ることは連動している。

## □D) 信仰をもって祈ること

## 1. 信じること

- (1) マタイ 21:21~22 イエスは答えられた。「まことに、あなたがたに言います。もし、あなたがたが信じて疑わないなら、いちじくの木に起こったことを起こせるだけでなく、この山に向かい、『立ち上がって、海に入れ』と言えば、そのとおりになります。あなたがたは、信じて祈り求めるものは何でも受けることになります。」
- (2) エペソ 3:12 私たちはこのキリストにあって、キリストに対する信仰により、確信をもって大胆に神に近づくことができます。
- キリストに対する信仰により・・・直訳「彼の信仰を通して」
- (3) ヤコブ 1:6~8 ただし、少しも疑わずに、信じて求めなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。その人は、主から何かをいただけると思っただけではありません。そういう人は二心を抱く者で、歩むべき道すべてにおいて心が定まっていなからです。
- 疑う人は、祈っても答えられない。なぜなら、疑う人は、「二心を抱く者」だからである。

では、何を信じたらよいのか。特に、祈りにおいて、信者が持つべき信仰の内容とは何か。それが次の2. である。

## 2. 何を信じて祈るのか・・・信仰の内容 3つ

- (1) **神は存在する**・・・ヘブル 11:6 信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神がご自分を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです。
- (2) **神は私たちの祈りを聞くことができる**・・・詩篇は、多くの箇所、神が祈りを聞くことができると証言している。詩篇記者は神に近づき、祈った。そのとき、詩篇記者は神の存在を信じていただけではなく、神は自分の祈りを聞き、そして祈りに答える力を持つお方であると確信していた。
- ・・・詩 6:9 主は私の切なる願いを聞き、主は私の祈りを受け入れられる
- (3) **神は私たちの祈りに答えたいと願っておられる**
- ① マタイ 7:9~11 あなたがたのうちのだれが、自分の子がパンを求めているのに石を与えるでしょうか。魚を求めているのに、蛇を与えるでしょうか。このようにあなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っているのです。それならなおのこと、天におられるあなたがたの父は、ご自分に求める者たちに、良いものを与えてくださらないことがあるでしょうか。

- ② ヤコブ 1:5~6 あなたがたのうちに、知恵に欠けている人がいるなら、その人は、だれにでも惜しみなく、とがめることなく与えてくださる神に求めなさい。そうすれば与えられます。ただし、少しも疑わずに、信じて求めなさい。
3. 信仰は神の約束の上に立つこと・・・ピリピ 4:19 また、私の神は、キリスト・イエスの栄光のうちにあるご自分の豊かさにしたがって、あなたがたの必要をすべて満たして下さいます。
- この箇所が強調しているのは、神の約束である。
  - 私たち信者の必要を満たし、養うと言われるのは、父なる神である。
  - その約束を実行して下さるのは、良き羊飼いである主イエス・キリストである。
  - 神の約束があるから、私たちは祈り求めるのである。
4. 祈る前に信じていること・・・不十分な信仰と十分な信仰との比較
- (1) 不十分な信仰 マタイ 17:19~20、マルコ 9:14~29、ルカ 9:37~42
- ① マタイ 17:19~20 それから、弟子たちはそっとイエスのもとに来て言った。「なぜ私たちは悪霊を追い出せなかったのですか。」イエスは言われた。「あなたがたの信仰が薄いからです。まことにあなたがたに言います。もし、からし種ほどの信仰があるなら、この山に『ここからあそこに移れ』と言えぱ移ります。あなたがたにできないことは何もありません。」
- 弟子たちが持っていた信仰は、小さな信仰であった。このケースに対応するには、小さすぎる信仰であった。
  - しかし、大きな信仰を持つように、とは言われていない。なぜなら、必要なのは、「からし種ほどの信仰」でよいからである。
- ② 重要なのは、信仰の大小ではなく、小さくとも中にいのちを持つからし種のような信仰かどうかである。
- 種は小さいものであるが、芽を出し、花を咲かせる能力をもっている。
  - 同様に、小さい信仰であっても、信じる対象である神には計り知れない力がある。「神には、この悪霊を追い出すことができる」と神の力を信じる信仰が、ここで弟子たちに求められていた信仰である。
- ③ からし種ほどの信仰の実例・・・ヤコブ 1:6 「すこしも疑わずに、信じて求めなさい」、神を疑わない信仰、これだけでよい。これが小さくとも中にいのちを持つからし種のような信仰である。
- ④ 信仰を伴った祈りが必要であると言われた実例・・・マルコ 9:29 この種のもは、祈りによらなければ、何によっても追い出すことはできません。

- この文脈では、口をきけなくする悪霊の追い出しのためには、「祈り」(マルコ 9:29)が必要であると、イエスは言った。それは、適切な祈りには、「神にはこの悪霊を追い出すことができる」と疑わずに信じる信仰が伴うからである。
  - 信者が祈りの中で何かを願い求めるなら、神にはそれができると信じる信仰をもって祈ること。そのような信仰をもって祈るなら、たとえ小さな信仰であっても、大きな成果を得ることができる。
- ⑤ 信仰に欠ける祈りでは、祈っても答えられない。祈りがむなしくなり、祈りの時間は、時間の浪費となってしまう。

(2) 十分な信仰 マタイ 21:18~22 マルコ 11:20~24

- ① 信者は、次のことを信じ続けること・・・【自分が祈り求めたことは、すぐにもそうなる】
- ② マタイ 21:22 「信じて祈り求めるものは何でも受けることになります」→この箇所の動詞の時制に沿って直訳すると「信じて祈り求めるものは何でも、すでに受けています」。信じる前にすでに受けている。これはどういうことか？
- すでに受けていると信じ続ける、そして期待をもってそのことが与えられるように祈り求める
- ③ 私たちは、信じ続けよう。そして、自分の口で祈り求めているさなかにあっても、頭の中では、神はすでにこの祈りを聞き、私たちの願い求めに答えてくださったのだ、という理解を巡らせる。これが、信仰の祈りである。
- ④ 神の答えは、自分が祈ったような仕方では、与えられないこともある。自分が求めたような答えではないことも、ある。しかし、神は必ず答えてくださる。

(3) 結論：信仰が先か、祈りが先か マルコ 11:22~24

- ① マルコ 11:22 「神を信じなさい」。その次に、23~24 節で祈り求めることが教えられる。神を信じること、これが先である。
- 何かを祈り求めるときに信仰を働かせるというのは、自分の信仰深さや信仰生活の長さを頼りにすることではない。祈りに対する答えを与えてくださる神を信じるということである。
- ② 神を信じるのが最初に来て、それから次に、「何でも祈り求める」となる。これが聖書の教える順序である。